はしがき

1990年の夏、就職して初めての出張先が四川省の涼山（リャンサン）と決まった時、飛び上がって喜んだことを今も覚えている。中国西南は幼い頃から憧れていた神秘の場所だった。1986年に制定された義務教育法の農村部における実施状況を調べるための出張だったが、まるで遠足前夜の子どものように興奮していた。

初めて訪れる西南、異なる民族衣装の人びとが行き来し、聞き慣れない言葉が飛び交う。日本留学を終え帰国したばかりの私には、何もかもが新鮮でエキゾチックに映った。しかし、にぎやかな町を離れて山奥の村に入るや否や、興奮は一気に冷めた。想像を絶する貧しさを目にしたからである。涼山はイ族が最も集中して居住する自治州だが、山岳地帯に点在するイ族の村は貧しく、児童の就学率、特に女子の就学率は低迷していた。現地の担当者は、就学率を妨げる要因として貧困、教育条件の不整備、保護者の不理解などを挙げて説明したが、特に興味深かったのは「民族の伝統」や「文化的背景」に関する説明だった。

イ族の場合、1950年代後半にまで存在した奴隷制に基づく家支制度が義務教育の普及に大きな影響を及ぼしているのだという。奴隷制の影響に関する説明に首をかしげる筆者に対して、「ここはまだいい方です。西南高原の山奥には母系制の原始民族だってまだ残っていますからね。彼らは結婚でなく走婚（ヅォウワン）（妻問い婚）をし、家では女が支配権を握り、財産も母から娘に継承されるらしいですよ」と言って笑った。しかし当時の私には、そのいわゆる「母系制の原始民族」などに興味を示す余裕はなかった。目の前の状況がショックで、「広い中国のことだから、奇妙なことの多さに驚くには及ばない」と相づちを打つことで精一杯だった。

後になって、彼らがいう「母系制の原始民族」とは、雲南省と四川省の境界に住むモソ人を指していることを知ったが、当時はモソ人についてもっと知ろうとも思わなかったし、まさかのちに自分が、9回もモソ人の村を訪れて調査を行うことになろうとは、もちろん想像もできなかった。

拙著『結婚のない国を歩く』においても触れたように、私がモソ人について興

味を持つようになった直接のきっかけは、「現代の文成公主」と呼ばれたある女性の存在だった。肖淑明（ショウスウミン）さんである。「文成公主」とは、唐の太宗時代に吐蕃の王ソンツェンガンポに嫁いだ王女で、特に中原の文化をチベットの奥地に伝え、周辺民族との交流に功績を残したことで中国では知らない人がいないほど有名な歴史人物である。肖淑明さんは、いわば中央王朝と周辺民族との和親に貢献した文成公主や、王昭君（匈奴に嫁した漢の宮女）の史話の現代版なのである。彼女は周辺少数民族に嫁いだ「最後の王妃」だという。

日月山の麓に建てられた文成公主の石像（青海省）

1943年、四川省雅安の明徳女子中学に通っていた彼女は、軍部と省政府の斡旋で16歳の若さで20歳年上のモソ人の土司（トゥス）（支配者）に嫁ぎ、「掌印夫人」として内政事務を掌（つかさど）ることになったのである。華やかな結婚式を終えて間もなく、彼女はすぐに護送の数十人の兵士とともに生まれ育った町を後にし、険しい山道を馬で1カ月以上をかけて歩いて濾沽湖（ルーグーフ）に辿り着いたという。在学時に「ミス・明徳」に選ばれ、文学と音楽にたけていた才女の運命はここから狂い始めた。土司夫人としての地位は、1949年以降の社会主義体制の確立によって脆くも崩れ落ち、彼女はやがて人民に君臨した「搾取階級」として粛清の対象に仕立てられることになったのである。「土地改革」「文化大革命」など相次ぐ政治キャンペーンの中で「反革命分子」「地主分子」のレッテルを貼られた彼女を待っていたのは、長い刑務所生活と強制労働だった。

彼女が名誉回復を得て普通の生活を手にしたのは、文化大革命が終了してから10年も経った1987年のことである。彼女を取り巻く環境はようやく好転し始め、1999年には涼山州の政治協商会議の委員（議員に相当）に選出されるに至った。2001年の夏には、嫁に行ってから初めての里帰りを果たし、58年ぶ

金沙江峡谷に沿って進む濾沽湖への道

りに家族や同級生と再会した。

この伝説的人物の帰郷は、たちまちメディアの注目を集めた。地元紙『雅安日報』が、「最後の王妃はもともと雅安の才女だった」という題で記事を連載（2001年8月4日と5日）したことで、彼女は一夜にして国中に知られる時の人となった。母系社会を営むモソ人の故郷として知られるようになった濾沽湖は、彼女の伝奇によっていっそう神秘的な色彩が加わったのである。

2004年の秋、私は「最後の王妃」を訪ねる旅に出た。その波乱万丈の人生を書き残したかったからである。

濾沽湖へは四川省の塩源県から入るルートと、雲南省の麗江（リージャン）から入るルートとがあるが、「麗江古城」が世界文化遺産に登録されてから、麗江経由で濾沽湖を訪れる観光客が増えた。麗江を出て標高4,000m級の山をいくつか越え、石畳の道を約4時間行くと寧蒗（ニンラン）に着く。そこからさらに狭い山道を乗り合いのバスで3時間かかる道程である。近年開通した麗江からの直通のバスでも、寧蒗で昼食のため1時間の休憩を取るので、結局6時間ほどの道程となる。バスが通らなかった頃は、徒歩で10日もかかったという。

濾沽湖は、雲南省と四川省の境界を跨って広がる水面標高3,000mの美しい湖である。白い雲が澄み切った紺碧の湖面をかすめ、水と空がつながる幻想的なパノラマが広がる。所々に立つ黄色くなりかけた柳やポプラの木々は、湖畔に佇む村々をいっそう美しく幻想的に彩る。濾沽湖は「東方女人国」として知られるモソ人の母系社会のシンボルである。

石畳の道の両側に木造家屋が軒を連ねる麗江古城

濾沽湖は、モソ語で「ヘナミ」あるいは「セナミ」という。「ヘナ」は「大きい水」の意味で、「ミ」は「女」「母」「陰」等の意味を含む。「母なる湖」の意味である。伝説によると、ここは元々「埧子（バーズ）」だったという。南の人は平原を「埧子」と呼ぶ。自然に恵まれた豊かな地域だったが、匪賊（ひぞく）が出没するようになってから、村の生活は苦しくなっていた。そんな村に不思議な事が起きた。土司家の牛飼い少年が、ろくに食べ物を与えてもらっていないのに、体は日

水面標高 2,700m の濾沽湖

増しに逞しくなっていく。首を傾げる村人に少年は秘密を明かした。実は、西にある獅子山に大きな洞窟があり、その中には食べきれないほど肉が詰まっているのだという。肉を切って焼いて食べても、翌日にはまた新しい肉は生えてくる。村の人たちは少年の幸運を喜んだが、噂はついに欲深い土司の耳に入る。土司は家来たちに、数十匹の馬で洞窟からその肉を引っ張り出すよう命令した。悪戦苦闘して引っ張り出してみると、それは洞窟の入り口に引っかかった巨大な魚だった。その魚を引っ張り出してしまったため、洞窟の中に溜まっていた水が一気に噴出し、たちまち「坝子」に散在していた村落を呑み込んだ。唯一、生き残ったのは豚に餌を与えていた婦人であった。洪水の波が迫ってくるのを見た婦人は慌てて猪槽（豚の餌を入れる桶）に乗り込んだ。水が引くまで漂流して難を逃れたこの女性が人類の祖先であり、その時に「坝子」に溜まった水が今の濾沽湖となったという。

モソ人の「ノアの方舟」と呼ばれる「猪槽船（ズゥツォウツァン）」は、湖での捕魚や水草刈りだけでなく、湖に浮かぶ島のラマ廟に観光客を運ぶ唯一の交通手段として今も現役で活躍している。濾沽湖は獅子山の麓から東南方向に落ちてきた水でできていることから、湖の東南に位置するこの村を「落水村」と呼ぶようになった。

モソ人の「ノアの方舟」と呼ばれる猪槽船

肖淑明さんの家は湖の四川省側の畔にあった。雲南省側の浪放村から猪槽

接客用に新しく建てられた「王妃園」

船を約30分漕いで四川省側の大経堂（ダージンタン）村に着く。そこから現地の人が「草海」と呼ぶ湖を右側に眺めながら1時間歩いたところに、「王妃園」の看板の掛かった建物が現れた。彼女を訪ねてくる記者や観光客が多くなってきたので、新しく接客用の家を建てたのである。応接間に案内されてしばらく待っていると、「遠いところをお疲れさま！」という声とともに「王妃」が小走りで入ってきた。小柄で四川方言を話す「王妃」は、握手を交わすとすぐタバコに火をつけた。かつての「ミス・明徳」ももう76歳の高齢である。2時間に及ぶ長い談話の中で、彼女はほとんど笑顔を見せなかったし、進んで自分の過去を語ろうともしなかった。インタビューは、ほぼこちらで準備した手順で進めるしかなかった。

私は、まず16歳だった彼女に軍部と省政府が自分をモソ人の土司に嫁がせた理由を理解できていたかどうかについて尋ねた。肖さんはあたかも質問を予想でもしていたかのようにすぐに答えた。

「政府の“漢摩親善”（漢民族とモソ人の親善）の意図は当時の私にも分かっていました。だから嫁入り道具に小学校の漢語の教科書を数十冊とオルガンを入れるようにお願いしました。モソ人の子どもたちに漢語を教え、音楽を教えたかったからです。都会育ちで苦労をしたことのない自分に土司夫人が務まるか、不安でした。何か微かに悲壮感のようなものを覚えていました」。

「政府の意図は分かりますが、秘境の地に愛する娘を嫁がせるなんて、ご両親にとっても大きな決断でしたね？」と尋ねたら、「父は軍部の将校だったから、ある程度覚悟ができていたかもしれません。私は嫁いでから里帰りをしたことがなかったし、父も50年ぶりに一度だけ瀘沽湖を訪れたことがありますが、もうカッコよかった軍人の姿ではありませんでした。一瞬話題が見つからなくて困りました」と寂しげな表情を見せた。

応接間の壁には58年ぶりに里帰りした時にクラスメートと撮った記念写真が掛かっていた。

「“ミス・明徳”あるいは土司夫人時代の写真などありましたら、見せていただ

けませんか」。

「子ども頃の写真や若い頃の写真は、もともと多くはなかったのですが、それさえも文化大革命の時に全部紛失いたしました。自分の手で燃やして処分したのもありますが…」。

文化大革命に話が及ぶと、彼女は無表情で続けざまに煙草に火をつける。

肖淑明さんと「王妃園」にて

「運命の悪戯に翻弄された王妃」は、かつて政府の協力要請に応じて匪賊を説得して下山させた経歴がある。周囲の反対を押し切り、彼女は女１人で馬に乗って匪賊が立てこもる山に入った。武器を捨てて新体制の下で新しい生き方をするよう説得したのである。最終的に男たちは全員下山して普通の生活をするようになった。土司夫人という特殊な立場がそれを可能にしたのである。しかし、この功績はその後に続く土地改革、文化大革命の中で彼女を守ることはできなかった。「王妃」は「人民の敵」として攻撃される側に身を置くはめになったのである。名誉回復を得た今は、議員として活躍し、また多くの孫たちに囲まれて幸せな晩年を送っているが、彼女は人生の大半を動乱の中で生きた。しかし、王妃は「それも自分の人生」だから瀘沽湖に嫁いだことを後悔はしていないという。

今は瀘沽湖のために、特にモソ人の文化を保護するために自分に何ができるかを考える毎日だという。新聞も数種類とっている。勉強を怠けるとすぐ時代遅れになるから毎日欠かさず新聞を読むようにする。仕事のないときは、書道を楽しんだり、家族や友人と麻雀をしたりして過ごす。交通不便もさることながら、高齢のこともあって出かけることはほとんどない。自然災害がなく気候温暖な瀘沽湖が自分にとって一番住み心地の良い所だという。

別れる際に「私の伝記はすでに出ていますので、それよりモソ人について書いてください。今、モソ人を誤解する人が多いです。外部の者が走婚ばかり取り上げ面白おかしく、好き勝手に書くからです。読んでいて腹が立つことが多いです。瀘沽湖周辺のモソ人の村をできるだけたくさん見て、モソ人の本当の姿を伝えてくださると有難いです」と「王妃」は言った。「モソ人のことについて無知ですが、頑張ってみます」と答えたら、「交渉成立ね！」と彼女は初めて笑顔を

見せた。

「王妃」と別れてから、濾沽湖周辺に2週間程度滞在して調査を進めることになった。雲南省寧蒗イ族自治県の永寧郷（ユンニン）、拉伯郷（ラーバイ）および四川省側の木里（ムーリ）は、モソ人が最も集中して居住する地域である。調査の中心となった永寧郷は、モソ人をはじめプミ族、イ族、チベット族、チワン族、ナシ族、漢族など12民族（85村、1万7,998人）が農業や畜産、観光業を営んで生活する、民族混住地域である。調査対象は、永寧郷のモソ人の村を中心としながら、必要に応じて、四川省側の達祖（ダズゥ）村、木跨（ムークア）村、左所（ズォスォ）、リジャズイ村も入れた。仕事の関係上、長期滞在はできなかったが、現地入りの回数を増やすことにした。長い時は2カ月、短い時は2週間程度の滞在だった。

調査は、小中学校の教師および生徒・保護者、地方政府関係者、宗教関係者（ラマ教の僧侶、ダバ教のダバなど）、村民等を含む約30人程度のインフォーマントに対して行うインタビューと、成人式、葬式、祭り、授業などの参与観察の方法で行った。また、必要に応じて会議の傍聴、家庭訪問、座談会の召集などの形式も併用した。家族の役割分担や生産労働の在り方を調べるために畑仕事にも意欲的に参加した。本書は、現地の皆さんの全面的な協力の下で行った計9回の現地調査を踏まえて完成したものである。

モソ人に関する研究としては、神話と言語の視点からナシ族（モソ人を含む）のルーツを探ったもの（諏訪哲郎、1985）、現地で行ったインタビューを記録してモソ人の妻問い婚と母系家族の在り方を紹介したもの（遠藤織枝、2002）、モソ人の歌掛けを調査記録したもの（遠藤耕太郎、2003）などがある。しかし、これらの研究においては、モソ人の通過儀礼や家庭教育、文化の伝承などの課題にはほとんど言及されていない。

山の祭りで焼香するモソ人の女性

本書は、9章立てになっているが、次の2つのモチーフを貫く内容構成となっている。

1つは、通過儀礼の視点から捉えるモソ人の「教育文化」である。単なる生理学的営みの過程でなく、文化的にいくつかの段階に分けて表象されるモソ

人の通過儀礼を、出産前の「妊娠祈願」の慣習から出産後の「太陽拝み」「満月酒」「命名式」に至る「産育儀礼」（第２章）、大人の資格を付与する「成人式」（第３章）、人生で最も重要な儀式として位置づけられる「葬送儀礼」（第４章）等を中心に考察することで、子どもの成長をめぐる民族の「工夫」と「癖」を浮き彫りにし、制度化された教育からは見えてこないモソ人の世界観や人間観を集約した文化装置を明らかにした。また、「舅は礼を掌り、母は財を掌る」（舅掌礼儀母掌財）という役割分担システムの考察によって、「父親のいない」母系家族において、「父性」が母方オジに担われるというモソ人の家庭教育の特徴を明らかにした（第５章）。

もう１つは、文化伝承の在り方である。従来の「伝統と近代の攻防」という命題に、「民族間の文化の葛藤と融合」という文化史的視点を加えて、①宗教、②学校教育、③イデオロギー、④近代化の４つの側面からのアプローチを試みた。まず、モソ人の「文化の源流」とされるダバ教が、チベット仏教の浸透とともに衰退している現状から、モソ人社会に内在した根源的な危機を指摘した（第６章）。

次に、中国の民族学研究における進化主義家族史観の負の遺産を整理した上で、モソ人が開発した「民族教材」の編纂および実施過程を分析した。そして、文字を持たない民族にとって学校が必ずしも文化伝承の装置として機能しない問題点を指摘し、民族教育が直面している課題を整理した（第７、８章）。最後は、伝統的な家族観や価値観を揺るがす近代化の急速な進展の中で、モソ人が取り組んでいる文化保護の現状と課題を明らかにした（第９章）。

濾沽湖は季節ごとに違う表情を見せ、人びとの生活も季節のリズムに合わせて移り変わる。濾沽湖の四季を体感できたことは幸運だった。春は住宅建設の季節であり、僧侶に家族の繁栄と無病息災を祈ってもらう季節である。暖かい日差しに包まれた村では、どこからともなく太鼓の音が聞こえてくる。夏は、女神を祭る「転山節」の季節である。獅子山の中腹に設けられた女神廟には濾沽湖周辺だけでなく遠くからも多くの人びとが鮮やかな民族服装を着飾って訪れる。女神に一年の平安と繁栄を祈願するのである。秋になると、永寧盆地は黄金色に覆われる。海抜 3,000m の高原で収穫される赤米、そして周辺の山々で採れるマツタケと、モソ人が大自然の恵みを満喫する季節である。濾沽湖は、冬は暖かく、夏は涼しい。緯度は低く、海抜は高いからである。湖は冬でも凍ることはない。村の

「高原米」の産地としても有名。秋の盆地は黄金の色に染まる。

入り口や道の両側に立つポプラの木は葉っぱが落ちて寂しいが、山々には依然として緑が茂る。春節（旧正月）にはモソ人の成人式が行われる。日の出と同時に太鼓の音が一定のリズムで響く家では、13歳になる少年あるいは少女が民族衣装に着替えて、大人の仲間入りを果たす。この日に村の入り口に立つと、成人式を終え、父親の家を訪問する新成人の姿が目立つ。

本書は、こうしたモソ人の日常の表情とその生の声を忠実に伝えることに努めた。本書がモソ人の社会と文化への理解を深めることによって、家族の在り方、民族の伝統、文化の伝承、異文化の共生、文明の在り方等について考えるきっかけとなることを願っている。できるだけ多くの方に読んでいただき、違う文化を楽しむ手がかりとなれば幸いである。

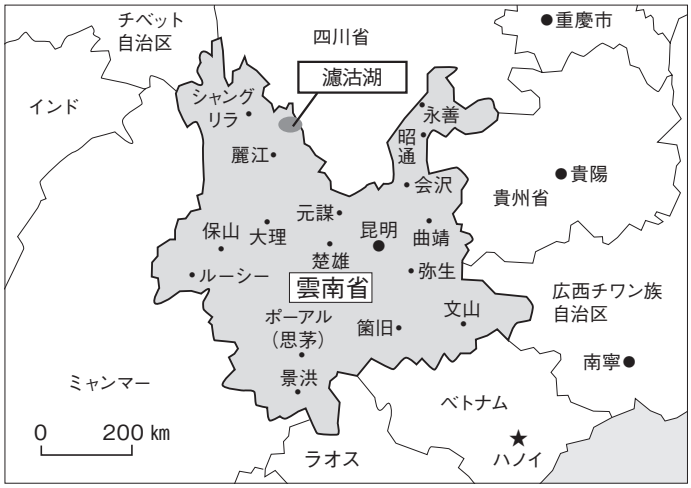
近年、モソ人に関する研究が着実に増えつつある。しかし、モソ人の母系社会は、依然「謎」の多い未知の領域といわざるを得ない。4,000m級の険しい山に隔てられた秘境の地には、人を簡単には寄せつけない厳しさがある。モソ人は言葉を持つが、文字を持たないため、研究の手がかりとなる文献はほとんど漢文であり、研究のほとんどがモソ人以外の研究者によって蓄積されてきたということができる。近年、高等教育を受けたモソ人出身の研究者が増えるにつれ、モソ人自身による研究成果が見られるようになってきたが、まだ始まったばかりといわざるを得ない。

こうしたなか、多くの宿題を残しながらも本書を世に送ることができたのは、文中に名前を挙げさせて頂いたインフォーマントの皆さんのご協力のおかげであることはいうまでもない。こちらからの無理な注文や、失礼にあたるような質問に対しても好意的に受け止め、全面的に協力してくれたのである。今、振り返ってみて自分がいかに幸運に恵まれていたかを感じずにはいられない。心より感謝申し上げたい。

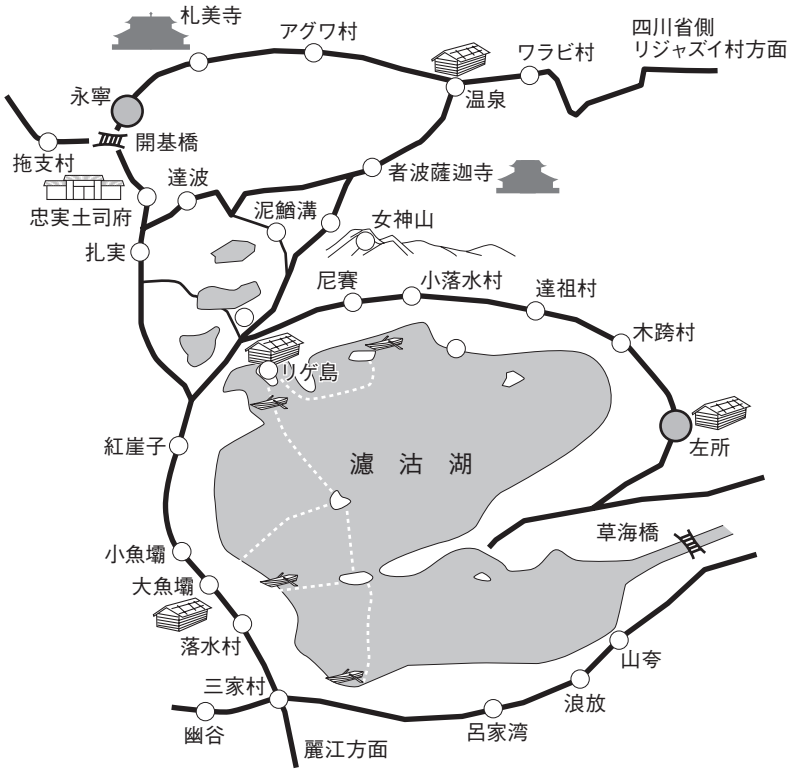
2011年　夏

著　者

雲南省の位置



濾沽湖の位置



調査地域：濾沽湖周辺のモソ人の村

調査日程

第１回：2004年10月１日～10月20日
第２回：2005年３月19日～４月５日
第３回：2005年８月22日～９月11日
第４回：2006年７月30日～９月24日
第５回：2007年２月８日～２月24日
第６回：2007年10月７日～10月30日
第７回：2008年３月22日～４月２日
第８回：2008年９月28日～10月19日
第９回：2009年８月19日～９月13日

東方女人国の教育

― モソ人の母系社会における伝統文化の行方 ―

目　　次

東方女人国の教育tb.indb　13　　11.7.19　10:30:55 AM

はしがき …… *i*

濾沽湖の地図　*x*

調査地域と調査日程　*xi*

第1章　「未然形」の民族
— モソ人のルーツとアイデンティティ — …… *1*

1．中国における民族の概念と「民族識別」　*1*
2．民族名称をめぐる攻防— モソ人とナシ族の関係 —　*6*
3．「指路経」が示す民族発祥の地　*10*
4．「東女国」と「女国文化帯」と「東方女人国」　*15*

第2章　モソ人の産育儀礼
— 母系社会を生きる子どもたち — …… *21*

1．祝福されて受ける生　*22*
2．「女児選好」の生育観　*25*
3．「私は鶏が鳴く前に生まれた」— 誕生日を知らない子どもたち —　*28*
4．「太陽拝み」と「満月酒」の儀式　*30*
5．命名式と宗教　*34*
6．学校教育と制度としての漢名 — 文化大革命の「遺産」—　*36*

第3章　モソ人の成年儀礼
— 童から大人へ — …… *43*

1．モソ人の成人式の由来 — なぜ13歳なのか —　*44*
2．記憶に残る唯一の通過儀式　*47*
3．少女が大人の仲間入りを果たした日　*51*
4．モソ人が語る成人式の意義　*58*

5．「大人に成る」ことと「人に成る」こと　62
6．試練型の成人式と祝賀型の成人式　65

第4章　モソ人の葬送儀礼
— 先祖の地に帰る日 — …… 72
1．葬式のある村　73
2．「プズ」— 葬儀の準備 —　75
3．「洗馬」と接客の儀礼および追悼行事　78
4．先祖の地に帰る日 — 雨の中の火葬 —　84

第5章　「養いて教えざるは、舅の過ちなり」
— 母系家族における母方オジの役割 — …… 92
1．父と子の特殊な関係 —「父を知らない」子どもたち —　93
2．親族名称に見る家族関係　96
3．養いて教えざるは、舅の過ちなり　100
4．父親の役割と舅舅の役割 — モソ人の男の役割選択 —　105
5．母系制と母方オジ　109

第6章　枯渇の危機に瀕した文化の源流
— 土着宗教の行方 — …… 114
1．祈りと儀式に生きる人びと — チベット仏教の伝来と浸透 —　114
2．永寧におけるラマ教の特殊性　118
3．現代の「玄奘法師」— 聖地を目指す僧侶の旅 —　121
4．危機に瀕した土着の宗教 — 漂流する心の故郷 —　124
5．伝統をめぐるジェネレーションギャップ　127
6．「出家」知識人の挑戦　131

第7章　モルガンの呪縛
— モソ人の母系社会は「活きた化石」か — …… *137*
1．母系制先行説と「活きた化石論」　*138*
2．中国における進化主義家族史観の受容　*144*
3．モルガンの呪縛は解けたか　*148*
4．母系制の合理性を探る — 若手研究者の台頭が意味するもの —　*151*

第8章　文字を持たない民族の文化伝承と学校教育
— 他民族の言語で自文化を伝えられるか — …… *159*
1．言葉と文字と学校教育　*160*
2．モソ人の母系社会への異文化の影響　*164*
3．「民族教材」の開発 — 内容構成と位置づけ —　*166*
4．学校外の諸要因　*172*

第9章　モソ人の母系社会は余命20年か
— 注目される伝統文化の行方 — …… *178*
1．「母系制優越論」の台頭　*179*
2．故郷の異変 — 動揺する母系社会 —　*184*
3．もはや秘境は存在しない —「世界の屋根」に及んだ変化の波 —　*188*
4．民族意識の喚起と迫られる選択　*190*

参考文献 …… *195*
あとがき …… *209*

■著者紹介

金（ジン）　龍哲（ルンジョ）（ JIN Longzhe ）

1955 年　中国吉林省生まれ。
1982 年　東北師範大学卒業、教育部大連外国語学院赴日予備校を経て、同年10 月政府派遣留学生として来日。
1988 年　広島大学大学院教育学研究科博士課程修了後、帰国。中国教育部中央教育科学研究所副教授。
1995 年 4 月　広島大学教育学部助教授
2003 年 4 月　神奈川県立保健福祉大学教授
2011 年 4 月　神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部長
教育学博士、比較教育学専攻

主な著書
『東京大学』（湖南教育出版社、1992）
『国際教育縦横』（【共】人民教育出版社、1994）
『中国少数民族教育政策文献集』（大学教育出版、1998）
『二一世紀の社会と学校』（【共】協同出版、2000）
『義務教育投資国際比較』（【共】人民教育出版社、2003）
『“先賢の志”に学ぶ ― 21 世紀の教育を問う』（【共】ジャパン総研、2004）
『世界の学校』（【共】学事出版、2006）
『こんなに違う！　世界の国語教科書』（【共】メディアファクトリー、2010）
『結婚のない国を歩く ― 中国西南のモソ人の母系社会』（大学教育出版、2011）

東方女人国の教育
― モソ人の母系社会における伝統文化の行方 ―

2011 年 8 月 31 日　初版第 1 刷発行

■著　　者――金　龍哲
■発 行 者――佐藤　守
■発 行 所――株式会社大学教育出版
〒700-0953　岡山市南区西市855-4
電話(086)244-1268㈹　FAX(086)246-0294
■印刷製本――モリモト印刷㈱

©Jin Longzhe 2011, Printed in Japan
本書のコピー・スキャン・デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。

ISBN978－4－86429－083－8